



TITLE:

人文 第13号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第13号. 人文 1975, 13: 1-36

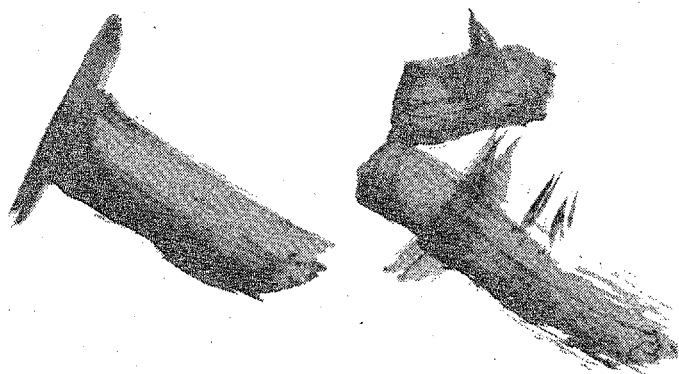
ISSUE DATE:

1975

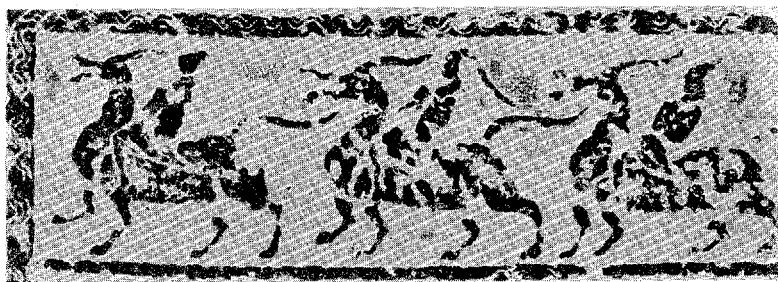
URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57139>

RIGHT:

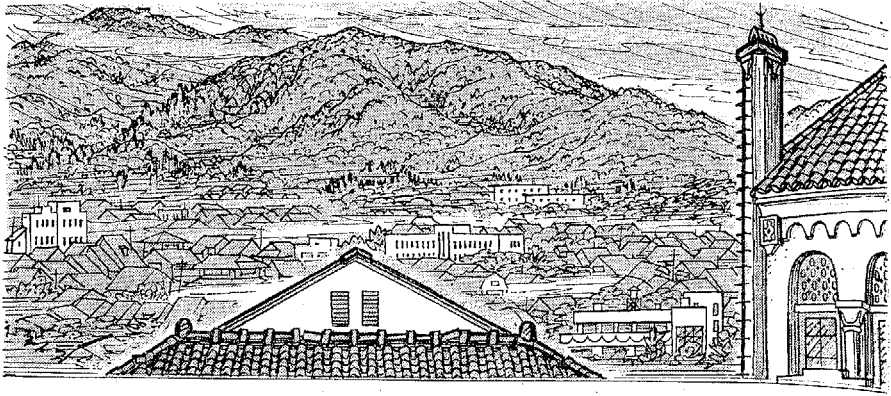


第一三號



1975

京都大学人文科学研究所



人 文 第一三号

1974年9月—1975年4月

も く じ

わたしの考え ある決算報告	鳥田 虔次	2
講演 開所記念講演 三経義疏に関する私見 藤原不比等について 森有礼と西洋 退官記念講演 考古学調査の回想 東洋学文献センターの十年 敦煌学の現段階	藤枝 晃 上山 寧平 園田 英弘 田中 重雄 市原 亨吉 藤枝 晃	6 14
書評 林屋辰三郎『日本文化の東と西』(雄山)／飯沼二郎『石高制の研究』(樋口)／吉田光邦『時から時計へ』(秋山)／吉田光邦『機械』(江村)／多田道太郎『遊びと日本人』(竹内)／小南一郎『楚辞』(多田)／飯沼二郎『日本農業の再発見』(山下)		14
共同研究のうごき 仏教史家と私(夫馬)／詩学事始(松田)／歩み(太田)		21
研究ノート 研究・業績・研究業績 思想比較の一視点 偶像破壊と個別研究	尾崎雄二郎 園田 英弘 見市 雅俊	24 27
旅 ボストンの買物(熊倉)／国際会議はハラがへる(横山) 書いたもの一覧(一九七四年九月—一九七五年四月) おくりもの(13、20、26)・人のうごき(36) カット・田中重雄		30

ある決算報告

島田 虔次

この号が皆さんのお手もとに渡るころには、私の転出も、すでに稟決せられていることであろう。

私が研究所に入ったのは昭和二十四年一月であつたから、今日まで、四半世紀以上になる。東方文化研助手時代を加算すると、三十年にちかい。当座は西洋部の鶴見俊輔氏に次いで少壮助教であつたが、いつの間にか、長老教授の仲間入りをしてしまった。ただ、この長年月、何ひとつ研究所のために貢献するところがなかったのは、慚愧というよりはむしろ、罪悪感をおぼえる。学報論文が四篇、研究所報告『慧遠研究』に論文一篇、索引一篇。研究所の正式な刊行物に載つたものは、たったそれだけ。準ずるものとしては、中世思想史研究班の名で出た謄写版『明仏論索引』一冊。もちろん、島田編の研究報告論文集など、一冊もない。島田という人間が本当に人文の所員であつたかどうか、後世、判断にくるしむ場合が出てくるかもしれない。

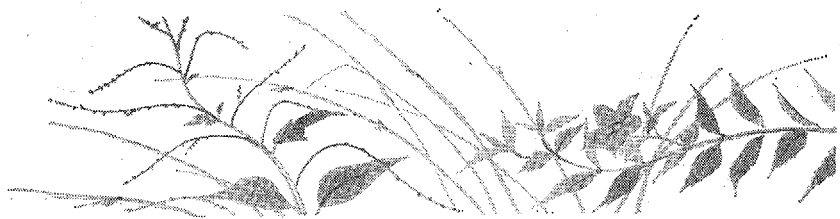
もちろん、この四半世紀のあいだに私の発表したものは、右のみに



とどまらない。単行本も数冊、たしかにある。いま研究所を去るにあたって、それらをひっくりかえりて一応の決算をやっておきたい。考えてみれば学生の三年間をのぞいて、学者としての私は、ただただ人文のおかげで成長できたのである。それを去るに当って、このような決算報告を提出しておくのも、研究所に対する礼儀といえぬこともなからう。

私のこの四半世紀やってきた仕事は、単純である。まず第一は宋以後の、つまり近世の思想史、第二は特に近代思想史。第一の分野では「中国近世の主観唯心論」「明代思想の一基調」（以上、学報）「体用の歴史」（塚本論集）「章学誠の大経皆史説」（岩波講座哲学）、これくらいは、何とか及第点にしてもらいたい。自分でもっとも重要なものと考えているのは『朱子学と陽明学』（岩波新書）で、これはせめて、八〇点ください。もっとも、あんなものの何処が学術的か、と一笑に付されるかもしれない。現に学界からは完全に黙殺されている。——それから、ちと体裁がわるいが、決算報告というからには頼みかきでもできぬ。「龔自珍・尊隱」（仁井田論集）、これは零点。

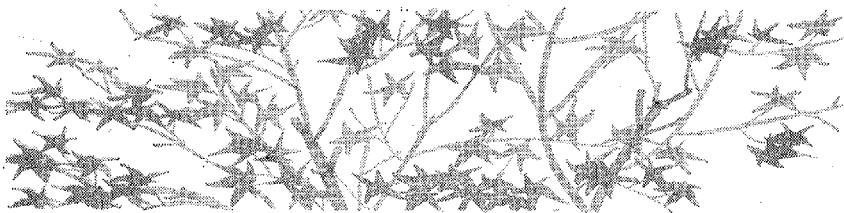
第二の分野で積極的意味があると信ずるのは、民族革命の思想家・章炳麟の顕彰に参加したこと。また、陳天華その他の辛亥革命期のパンフレット（英語でパンフレティア）の紹介、訳注として『中国革命の先駆者』『辛亥革命の思想』（ただし、共編）。七〇点。七〇点というのは東洋史学界では、このようなものは単なる普及の業で、提高を任務とすべき学者の本領とはみとめない、という批判もあるう、それで遠慮しておいたのである。しかし私としては近代史のばあい、このような原史料



の紹介訳注は、学者として緊急事の一であると信じている。それによつて、広く非専門家の発言を容易にしうるからである。わが国における維新史研究、古代史研究が飛躍的發展をとげたのは、狭い意味での専門家以外の知識人の活発な発言があったからこそであり、非専門家も原史料に近づくことができたからである。それにまた、ヨーロッパの革命家の名簿はそらんじておりながら、郷容の何人たるかもしらず、章炳麟の何人たるかもしらないで、それでインテリ（日本のインテリ）として通用しているというのは、あまりに奇態ではないか。

それでは、私の仕事のマイナス面は如何。学力の根本的不足は、これはいま論外として、一言にしていえば、提言したり先鞭をつけたりすることはあったが、何ひとつ締めくくりというものがない、ということである。あまりに粗枝大葉、大刀闊斧であつて、精密な考証に欠ける、ということである。問題に、それにふさわしい限定を与えることができず、次から次へと延べつ幕なしに展開して、收拾がつかなくなることもある。「以下次号」式の予告をしておきながら、一向その約束を果さぬことである。甘い編集委員だと、嘗めてかかつて締切目を遵守せず、逆にまた秋霜烈日、酷吏伝中の人に遭うと、途端にヘナヘナとなつて、いかげんで論文を結束してしまう横着さである——。こうして文字にあらわそうとすると、自分の欠点というものは、案外つかみ出しにくいものであることに気がついた。むしろ同様であつた皆さんの御指摘にまづ以外にない。

研究所での最後の仕事として、五四運動研究班の主宰のほか、個人研



究として、中國、朝鮮、日本を通じての儒學思想史、とくに朱子學史を書いてみたいと思っていたが、それも今は夢となってしまった。停年までのあと五カ年半、新しいポストでの激務は、到底その計画の遂行をゆるさぬであろう。残念といえば残念であるが、どうにも致し方ない。残念といえはもう一つ、これは多少方角のちがう話であるが、やはり書いておきたい。それは、私の酒量が大きくないために、同僚諸氏との愉快的な放談の席に最後まで連なることができず、多くのばあい、中途で失礼してしまったことである。別にアルコールが嫌いなわけではない。體質的に早々に参ってしまうのである。もちろん、座を白らけさせるなどのことは決してなかったと信じているが、ひとり夜道をかえりながら、何か物足りなく、自分に対して腹立たしい思いにさいなまれたことも、一再ではなかった。今となつては、とりかえしがつかない、大変な損失をしたような氣持がして、あらためて悔やまれてならないのである。

何だか妙な決算報告になつてしまった。貸し方をはるかに上まわることが明白な借り方の部分が、さっぱり具体性を欠いてしまつて、何ともサマにならない。結局わたくしは、最後の最後まで、締めくくりのわるい男である。

さらば、皆さん、長年の御寛容と御厚情に対して、改めてふかいふかい感謝を捧げます。そして、御學運の一層めでたからんことを、心からお祈りいたします。

紙面づくりの都合で水増しを命ぜられ、冗漫がいよいよ冗漫となつた。
おわびする。



講演



開所記念講演

十一月二十日
於イタリア会館

三經義疏に関する私見

藤 枝 晃

一 維摩義疏

『維摩義疏』の原本は失なわれて、いま法隆寺には奈良時代の写しに係る卷子本（不完本）のみが残る。一九六三年の調査で、この卷子本に白点と角点とが施こされているのを発見し、翌年春にその写真を撮影した。角点なるものは極めて最近に知られたもので、そ

れを写真に撮影したのは、このときを以て最初とする。

二 法華義疏

聖徳太子御自筆と伝えられる卷子本（四巻）が、明治十一年に法隆寺より帝室に献納せられ、今は御物となつて存し、立派な複製本も作られている。一九六四、七四年の両度に原巻を見る機会をもった。その形態（料紙、書式、書体）から見て、これは典型的な隋代写本であり、中国本土の然るべき仏教の中心地で職業写字生によって書かれたものと認められる。奈良時代になつて、巻一の首行を切取つて、表紙・見返しを補修し、見返しの上に紙片を貼りつけ、そこに標題（内題）と撰号（此は大委国上宮王私集、非海彼本）とを書きこんだ。こんな行為によるものであるから、これが太子の御自筆ないし撰述であることを信ずるわけに行かない。

三 勝鬘義疏

『勝鬘義疏』の原本は失なわれ、鎌倉刊本までしか溯れない。その巻首の形式は『法華義疏』のそれと同じであるから、やはりこれの撰号も拠り難いことになる。この本の内容の七割ばかりは敦煌発見の一注釈書（二本あり、共に北京図書館蔵）と同文であり、敦煌

本と太子本との両疏は同一原本から出たことを知る。その不一致点について、太子本の方には削除・改訂・増補についての注記があり、それらの分析によって原本の形にもある程度は近づくことができる。敦煌本はその原本の単純な節略本であり、太子本は同じ原本について増補・改訂・節略したものと云えるが、大筋から言えば大幅な節略本である。この改修作業は原本より三〇―五〇年後に行なわれたものの如くであり、改修の意図は、その間の同経注釈学の進展に伴って、他の注釈書に見える多くの新説を取り入れて、時代に適応せしめんとしたものであるらしい。

この様な改修の作業は、当時の長安・洛陽あるいは建康（南京）などの仏教学の中心地であつてはじめて可能な性質のものであり、故津田左右吉の如く、推古時代の飛鳥に突如として高級な仏典注釈書が出現することはおかしい。確かに、そのためには高度な研究集団と写経組織の存在を前提とするが、歴史にはその痕跡が認められない。もし、あつたとすれば、言わば、突如として消滅した格好である。この三種の注釈書が記録に現われるのは百年後の奈良時代になつてのことである。

藤原不比等について

上山春平

藤原不比等については、一冊の単行の伝記もないほどに、その人物像は歴史の塵の中に深くうずもれてしまっている。その埋もれた姿をほりおこすためには、まともな実証史学の方法のみにたよっていたのでは、恐らく手のつけようがあるまい。そうした意味で、この人物の姿を復元するという作業は、その作業に従事する者の歴史方法論の真価を問う試練とならう。私は、敢てこの試練を通して、これまでに私なりの仕方では、造形してきた歴史理論の当否をたしかめてみたい。私にとって歴史理論の造形は歴史哲学への志向によって導かれていくという実情から、不比等とのかかわりは、一種の歴史哲学のプラクティスとしての意味をもっていえると言えよう。

一般に実証史学の方法は、真実の断片をつなぎあわせて真実の像を構成する、といった手続きを暗黙の前提としているが、不比等のばあいのように、出発点と

して利用されるべき真実の断片がきわめて乏しいばかりには、こうした乏しい断片は、そこから何らかの帰結をひきだすべき前提として用いられるよりも、むしろ、他の方法で構成された仮説の検証ないしは反証の手がかりとして用いられる方が、より有効性を發揮しうるのではあるまいか、といったぐあいに私は考えている。

このばあい、仮説を構成するための手がかりとしては、真実の断片とみなすには多くの問題をはらんでいるような虚構的資料を用いることができよう。そうしたものとして、例えば、栄華物語・大鏡・今昔物語などにあらわれる藤原氏の歴史や不比等にかんする記事には、虚構の背後にひめられた真実をつたえるものがあるように思われる。その他に、伴信友の『松の藤靡』や折口信夫の『死者の書』などにも、貴重な示唆がふくまれている。

こうした虚構的資料とならんで、私が特に着目しているのは、古事記・日本書紀・令集解などのような書物のデザインそのものであり、そこに私は不比等の政治構想の投影を見いだす。そこには、あらかじめ、令集解に記されている養老令の原型となった大宝令のデザインだけでなく、記紀のデザインにも、不比等の意図が大きく作用しているという想定があることはいう

までもないが、こうした想定をもとにして、記紀や令集解を、私は、いわば体系的資料として用いてみようというのである。私は、こうした観点から埋もれた不比等像の復元に挑んでみたいと考えている。

森有礼と西洋

園田英弘

明治の思想を分析するとき、一つの重要な軸として「西洋」―「日本」というものが考えられる。欧化主義と国粹主義の対抗関係を中心にそれぞれの思想の核心にせまろうというわけである。明治という時期において、西洋を否定することが夢想であるのと同様に、日本的であることを無視するのは非現実的である。欧化主義者といえども日本を或る部分において肯定せざるをえず、国粹主義者といえども西洋的なものの絶対的否定はありえない。要は、思想の中で、西洋と日本がどのような型においてであれ、構造化されて把握されていることが重要なのである。言い替れば、西洋も日本も、或る意味においては肯定されなければなら

ず、同時に両者は或る観点から共に否定されていなければならぬ。そのようなことは一体どのようなにして可能か。

森有礼の後期の思想は、このような点に關して、明治の歐化主義の思想的到達点として、注目すべきものをもっている。それは「普通史」という観点の出現である。一般的には、西洋近代に文明という普遍的な価値が体现されており、その受容こそが日本の進むべき方向であるとするのが欧化主義の根本的発想なのだが、森の場合、明治十年代という時点において、西洋と文明を区別し、文明という観点から西洋を相対化し、返す刀で日本をも相対化した。西洋を相対化することとは、西洋社会の現実の中に貫かれていた西洋の「特殊性」を認識し、その背後にある「原理」をも否定することである。

具体的に言えば、森が西洋に見た特殊性とは、一定額以上の納税者に参政権を与え、この者たちが選挙によって国家意志の決定者を選出するという、制限選挙制による代議制であった。注意していただきたいのは、森は普通選挙制を主張しているのではない。選挙によって国家意志の決定者を選出すること自体を西洋的特殊とし、日本に導入することを否定しているのである。なぜ特殊なのか。それは、政治には知徳兼備の者が必

要であるが、納税とはこのような能力を意味しておらず、能力の異なる者が平等に政治に参加するという西洋的代議制は、西洋の歴史的特殊性に由来するものである。つまり、権利としての政治参加は普遍的な価値としての合理的根拠をもたない。したがって日本は、日本の特殊性を考慮に入れた、別の政治制度を考えなければならぬ。こうして森は「選挙」に替えて、知的能力と道徳的能力の最もすぐれた者が国政に参加できるような「選抜」のシステムを考案した。

結局、森の代議政体論の中心は、「公正」な政治の実現という目標に向けて、日本と西洋の政治的伝統の差異を考慮に入れたうえで、最大限に合理的思惟をはたらかせて構想された「選抜」というものからなっていた。そうして、帝国大学を頂点とする彼の教育制度についての構想は、以上に述べたような、森の歴史認識と国家論の枠組の中に位置づけられないかぎり、十分に理解されず、その歴史的役割や社会的機能も見逃されてしまふであらう。

退官記念講演

三月二十四日
於 楽友会館

考古学調査の回想

田 中 重 雄

昭和十七年の入所の目的は雲岡調査の測量製図にあった。前半の十五年は主としてその為に、後半の十五年はそれに連なる、イラン、アフガニスタン、パキスタンの遺蹟の測量と製図に当った。その中間の数年間、に研究室として大陸文化の接点として対馬、吉岐、佐賀、唐津周辺が選ばれ発掘調査が行なわれた。

仏教彫刻の形式とその変遷を語る場合、中国仏教の最盛期に造成された雲岡は実に豊富な造型例を示して呉れる。雲岡の持つ迫力、圧倒感、洞内一面に掘られた彫刻群と背後に控える万巻の仏教経典の重厚さ、又それを掘削せねばならなかった人間の弱さにあるので

あろうか。写真は技師、羽館易氏により時には八枚の鏡を以て光りを導入、ドイツ製、カールダイスのレンズを極度に絞り時計を使はず、勘だけの二分ないし四分間をかけて洞内の暗部も捉えられた。

後者のパキスタンでは自然洞の仏教山寺、カシミール・スマストの高い天井を計る時、トランシットだけで高さをわり出す方法の説明等。

人は採集狩猟生活のもと、音楽や踊りと同時に、それよりは必然性があつたであろう造型工作も行なつた。発掘によって出土された遺物は歴史を裏付けは正もした。絵画を含めてあらゆる造型されたものは、個人作家の作風の変化、地域、民族の持つ特異性もひつくる時代と共に変遷して来た。その作例は美術全集が説明して呉れるのであるが、その中で抜き難いのは民族のもつ造型感覚の相違であり、仏教彫刻の源流であるガンダーラ様式、マトゥラー地方のグプタ様式、又南インドの彫刻とその流れを考へる時それ等の地方の人類構成の相違をもつと強調してもいいのではないか。そうした論文は、インドで既に発表されていることでもあるうか。

つけ加へるならば、同時情報の入手出来る現代、当然薄れる可き筈の造型の上の地域民族性が消え難いのはそれなりに長い年月に洗練され要約された線と型と

色彩の必然性の上に立っているからであらう。ただ安住、渋滞、飽きということは考えられる。一方に一切の伝統的なもの情緒的なものを排し何か原理を見いだそうとする抽象の世界があり、造型の中の二つの流れは互に相手を認めることによって自分の立場をより鮮明に認識し、進展して行くことであらう。

東洋学文献センターの十年

市原 亨吉

京都大学人文科学研究所附属東洋学文献センターが発足したのは、昭和四十年四月一日である。本年の三月三十一日で、丁度、満十年になる。

東洋学文献センターは、東洋学に関する文献・資料を収集し整理して、研究者の共同利用に供すること、および東洋学に関する学術情報活動を行なうことを、その目的とする。この目的に沿って、人文のセンターでは、設立の当初より、

(1) 『東洋学文献類目』の編集・刊行

(2) マイクロ複写による明代文献、特に明人文集の収

集

を、二本の柱として事業活動を行なって来た。

『東洋学文献類目』は、がんらいは、人文科学研究所プロパーの出版物であったが、これをセンターにふさわしい事業であるとして、その編集責任を移管された。

昭和四十年三月に一九六三年度版を刊行して以来、一九七二年度版に至るまで、毎年一冊ずつを刊行して十冊に達した。近く一九七三年度版が刊行される予定である。

(2)については、人文科学研究所の蔵書（漢籍）を、より充実させ、研究者のなお一層の利便をはかるためにとり上げられた。

最初の三カ年には、内閣文庫を中心に、約二、〇〇〇点、七〇万余冊を収集した。四十二年以降においても、毎年平均五、六万冊をひきつづき撮影収集した。昭和四十三年三月に、中間報告として『明人文集（景照本）目録稿』を印刷、配布した。国内における明人文集の収集は、昨年中をもってあらまし達成せられた。そこで、人文科学研究所既蔵の明人文集に、センターにおいて収集したものを併せて、『京都大学人文科学研究所所蔵明人文集目録稿』の作成に着手し、その作業をほぼ終了した。収録件数は一千百三十八点に上る。

収集は明人文集に止まらず、清人文集、今地志その他にも及んでいる。

また、この二、三年来、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センターと分担して、全国漢籍調査、漢籍担当職員講習会の二つの事業が新たに始められ、ようやく軌道にのりつつある。

索引の編纂もまた、センターの事業活動の一環として積極的にとり上げてゆきたいものであるが、その着手には、人員、予算の裏づけが先決問題である。

敦煌学の現段階

藤 枝 晃

昭和二十七年と三十八年との開所記念講演で、同じ題でそれぞれの時点での展望を試みたことがあり、こんどはその後の一一年間の発展を主題とする。二十七年には、敦煌芸術研究所ができて、敦煌学が敦煌自体をも研究対象に取入れることが主題となり、三十八年には、スタイン、北京函写本コレクションの全体のマイクロフィルムが来て、写本の全貌にちかいものが知られるに至

ったことを主題とした。

三十九年に私は第一回のヨーロッパ旅行に出た。これによって写本並びに遺物の原物に多く接することができ、レニングラード・コレクションの実体を確認し、ペリオ・コレクションのマイクロフィルムを多量に持帰り、また自身でもかなりの量の写真を撮った。実物に接しての精密な検討と、写真などによる手持ち資料の充実とは、通計四回に及ぶヨーロッパ旅行の間にその後も進展をつづけ、また他の研究者たちによっても行なわれてきた。

こうした諸条件からの当然の帰結として、研究方法の転換が促されることとなった。その一つの現われは、敦煌写本全体に通ずる通則をふまえた写本総論の試みが可能になったことである。欧文紀要『Zinbun』9, 10 掲載の“The Tunhuang Manuscripts”は、総論の中の序説にあたるものであり、また序説・各論を併せて要約した同じ題の小篇を別に発表した(Essays on the Sources for Chinese History 所収)。また今年度の文学部仏教学での講義も総論の一つの試みである。総論の基本となるのは、六一—一〇世紀の写本を二〇〇年ごとの三期に分け、さらに第一・二期の中間に一つの過渡期を立て、都合四期に分ける区分法である。

この敦煌写本総論は、古写本を扱かうについては、印刷した本をよむのとは違った態度、写本を写本として扱かう研究方法の確立を目指すものである。その方法の具体的な現われとして上山大峻「大蕃国三藏法師沙門法成の研究」を挙げ得る。

現在、この方法による論文を集めた『東方学報』特集号第二を準備中である。また、「第一期写本」(北朝期)を網羅した一つの資料集も準備中である。後者によって、隋唐仏教学の源流としての北朝仏教学、ひいては北朝の学問一般の実体を示すことを意図する。これらの研究を進める上に、現在では周辺の諸専門学の領域との間にまだ大きな間隙が残されている。専門領域の研究者との共同作業、あるいは部門にこだわらない敦煌学の方向といったことが当面の課題となっている。

われわれの主要材料は国外にあるので、外国の学界との協力が必須である。トルファン資料をもつ東独の学界との協力はとくに順調である。他面、協力がうまく行っていない国々もある。

附記——この講演の速記が『図書』三〇九号に掲載せられた。

おくりもの

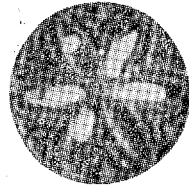
人文科学協会助成金 ①

昭和四九年度は松本英紀氏と岡本務氏が選ばれた。ともに研究者としては必ずしも恵まれない環境にあつて、すぐれた業績を示された篤学の士である。

松本英紀氏

松本英紀氏は、昭和四四年立命館大学大学院文学研究科修士課程(東洋思想専攻)を修了以来、高校非常勤講師として勤務に携りながらも、一貫して中国近代史(特に辛亥革命前後の政治思想史)の研究に邁進し、早くから辛亥革命→五四運動研究班に参加し、『立命館文学』等において、その成果を世にとおている。氏が対象としている分野は、複雑な政治過程と膨大な資料操作の故に、透徹した洞察力と緻密な読解力とを必要とするのであるが、氏は、陳独秀・宋教仁等の代表的人物の政治思想を追及することによって、その時期の政治思想全体の流れを把握するという方法を用いて、着実な研究成果をあげている。最近、特に宋教仁の研究に傾注し、「中部同盟会と辛亥革命——宋教仁の革命方策」(訳稿、宋教仁の日記)等の労作によって、辛亥革命における中央革命と辺境革命の論争について、貴重な考察を加えつつある。

書評



林屋辰三郎『日本文化の東と西』

(新書版、一九二頁、講談社)

昭和××年。いかなるいきさつからか、しらないが、わが国が、さる大国の覇権に服して、あらゆる旧制度が廃され、すべて、その国の方式にならねばならなくなった。とはいえ、寛容にも、たったひとつだけ、日本人の旧制度の存続がみとめられ、いま、そのひとつをなにするかという、ぬきさしならぬ諮問が、ある大学のさる研究所に、くだされた。

近代政治学者日先生は、いつものように、無理難題をもちだし、そのひとつは、主権としての施政権だと主張した。文学史家A先生は、日本語こそ、そのひとつでなければ、と流暢な日本語で、説いた。科学史家

Y先生は、ひとの意表をついて、暦法と年号に抛らねばと、古今東西の事例を渉獵して、論じた。近代史家I先生は、とんでもない、なにはともあれヒロヒトだけはごめんだ、と無学文盲の学者どもに、言ってきた。議論白出、とどまるところをしらぬかにみえたとき、会を司どる、長老の日本史家が、満座をしずめて、声をはりあげた。

「今わたしたちは、日本銀行のお金を使っているから、何とも思いませんけれど、これが戦後(太平洋戦のことであろう)アメリカのお金、ドルを使わねばならんようになつていたら大変ですよ。中世とくに室

町時代にはお金が全部中国の貨幣を使っているから、これは中国に完全に依存しているのです。」

かつて、この日本史家は、昭和四十九年のころ、『日本文化の東と西』という著書のなかで、いくたびもくりかえし、そう書いたのだという。貨幣の制度だけは、他国にならうてはいけないのだ、という。わけ知りのはなしによれば、その本のなかで、かれは、日本文化と日本の歴史を解くための重大な鍵を、おかねの制度にもとめることを、提唱した、という。もっとも、このばあい、ゼニというほうが、語感がよいが。

西日本の銀と、東日本の金。中国から輸入された銭。そして、もうすこし学問的にいえば、土地経済と貨幣経済、農業と商業、生産の価値と流通の価値。

この日本史家が、日本の西の文化の代理人として、商業と流通、つまりはゼニの歴史を説くやりかたは、かつて昭和四十九年にも、熱をおびていたそうだ。著者にも、たいそうなゼニをもたらしただという、その新書の旧論は、そのためかどうか、いま昭和××年にも、微動だにしていないうだ。

経済学者K先生が、やおら立って、談じ

はじめた。かつてマルクスがいったとおり、それこそ、貨幣の物神性崇拜なのであった……。

わたしの白昼夢は、そこでとぎれた。せ

飯沼二郎『石高制の研究』

—日本型絶対主義の基礎構造—

(A5判、二二四頁、ミネルヴァ書房)

飯沼さんの意志の強固さに、今さらと言われようが、やはり三嘆せざるをえない。本書の根幹は、敗戦直前の四年間の研究の蓄積、ことに東京上野の帝國図書館所蔵の「豊富な資料」三千冊によった「石高制についてのノート」である。「筐底」に秘められること三十年、いま陽の目を見た。

しかも、この主題についての従来の研究成果は五指を出でず、それらは時間的・空間的に限定されている。本書は、石高制についてのわが国最初の包括的研究と言うべきもの、これ以後、無視することを許さぬ必読の書で、私たちはまたも飯沼さんの執念の恩恵に浴したわけだ。

その反面、三十年前と「問題意識はまっ

つかく新館がたったのに、いまだに、ブロック塙の修理の騒音がきこえてくるためだった。(樺山紘一)

たくちがってしまっていた」ための「全面」「書き直し」作業に由来するのもしれないが、素人のおかめ八目には、処女地開拓に避けがたいショートカットも見てとられるようだ。

著者は、前著『地主王政の構造』で確立した「論理」「一般法則」の「特殊日本的」なありかたをさぐるべく、「日本の近代社会を生み出した、日本の封建社会」へと遡及する。「天皇制」については「別の機会にゆずり」、徳川幕藩体制において、「石高制」という全国画一的な制度(中略)をチャネルすることによって、はじめて將軍家の権力が、すべての領主に貫徹した」ことを分析する。そのかぎりで間然するとこ

ろがない。

この立証をふまえて、徳川幕藩体制が「特殊日本的」な「中央集権的な封建制」「絶対主義」であった、との結論が導きだされるのだが、「領主に貫徹」したのみで、「中央集権的」となしうるかいなか、さらには「中央集権的」なだけで「絶対主義」となしうるかいなか、疑念をぬぐいきれぬ読者もなしとすまい。かつての共同研究仲間の人で基本的立場を等しくする評者には、なにかもどかしい。

もう一つ、さきの引用文中、中略とした個所には実はカッコ付きで「その内容は問わない」とある。「問わ」れない「内容」は何か、直接の明示はない。

「表高」にたいする「内高」とかわかることは扱われているが、それ以外にも、たとえば——石高制の「成立」については触れられている地域差が、その「変遷」「廃止」についてはあまり追跡されていない。まさに「画一」性の「画一」性たるゆえんかもしれないが、「近代社会を生み出」す革命＝明治維新とのかかわりで、隔靴搔痒の感をまぬがれない。

以上、見当違いの望蜀の言、その一言半

句でも飯沼さんにとりあげていただければ、幸いである。

(樋口謹一)

吉田光邦『時から時計へ』

(新書判、一四三頁、平凡社)

先日、『人文』新館落成記念号のために、

僕はリンホフ・スーパーテクニカという大変なカメラをひっさげて北白川の旧本館の正面南向きの壁についている日時計を撮りにいった。白亜の壁から青空を断ち切るようにつき出した針を、逆さになってフラインダーの中で眺めているあいだに、その影は確かに少しずつ動いていた。同じ旧本館の各共同研究室に、当初掛けられた一週間搾きの円時計も、今や毎日その役目を果しているのは、玄関の上のものと、僕のいる地理研究室のものだけになった。そして新館の中庭に掛けられた大時計は、五時になってお家に帰りましょうという校内放送まで運動場で遊んでいた、幼ない日々を想い出させてくれる。

人文の時から時計を描いてゆけば、こんなことになるのかな、と思いつながら読ませ

てもらった。

この本は店頭でパラパラと頁をめくってその美しい写真から予想されるような時計の技術史、あるいは文化史の概説ではない。題名の「時から」に示されるように、人間が時を、永遠をどのように考えてきたか、いわば時の思想史に主点が置かれている。後半四分一ほどでは、時計の歴史が語られているが、その部分は二段組みになっている、このような組み方は同じシリーズの他の本には見られないことから推して、時の思想史を前面におし出す著者の意図が伺える。また時計の歴史といっても、ダリの曲がった時計の絵や現代のデジタル時計を引きあいにしながら、著者お得意の卓抜した文明批評も展開される。時間論の書は難

解であるのが普通だが、この書は古今東西に涉って哲学者・思想家の諸説を要領よく

紹介し、僕のような気軽な読者でも退屈させない。

時間に並ぶ概念としてあげられるのが空間なら、空間を支配し征服する技術の象徴は地図であろう。地図の歴史はやはり空間の思想史となり、そして古地図はとても美しい。

しかし、時計とはヨーロッパにおいてはかくも美しいものなのか。教会の塔に、駅舎に、市庁舎に、城門に。完全に景観の不可欠の要素と化しているその姿に、僕は驚嘆させられる。このことはおそらく市民共通の広場をもつ文化と何か関係がある。大型機械時計の発達しなかった日本に、このような姿のないのは当然ながら、ゴーンと鳴るお寺の鐘が、ヨーロッパの聖堂の時計や鐘と同じ機能をもっていたのか。あるいは中国では、等々。針の動かない写真の時計を眺めながら、忙がしい時を忘れて楽しい一時がすごせそうである。七月七日十二時二十四分記。

(秋山元秀)

吉田光邦『機械』

この書は、図が多く、図を見ているだけでたのしい。また、本文も近代以前の日本を中心とした機械の具体的な紹介が主であり、堅苦しさはない。

とくに力が入られているのは、水車、ろくろ、フイゴ等の部分かと思われるが、中でも、水車の発達について多くのページが割かれている。機械が道具と違って、人間の技と切れた所で、ひいては人間とは独立して動くものとするれば、水車は、近代以前の代表的な機械といえる。しかし、水車は、日本では様々な条件のためにあまり普及しなかったようである。ただ面白いのは、簡車（ノリア型水車）に対する日本人の対応の仕方である。簡車は、揚水器として最も効率的な機械であったが、先進地帯では生産に利用されず、「宇治の水車」のように歌に詠まれ、土地の名物として終わっている。また、この書の水車の節でも、日本人の同じような対応の仕方が挙げられている。

(A5判、二三四頁、法政大学出版局)

車は、日本では自然条件のためにあまり普及しなかったが、祭礼用山車としては、特異な発達を遂げているのである。このことは、江戸時代に、精密機械としての「からくり」が見世物として大いに発達したことと合わせて考えさせる。

日本人は、機械がその土地に合わない場合にも、それを廃棄しようとしなない。さらに、十分利用可能な機械をも、生産に利用するよりは、見てたのしむものとしてとらえている。これは、機械を移入する立場にあった、日本人特有の性向なのであろうか。それとも、(他の民族の機械への対応を精しくたどってみないとわからないが)前近代の人間の精神構造の深い所に関わるものなのであろうか。機械の時代といわれる近現代のあり方自体とからめて、面白い問題を内包しているように思われる。

この書は、近代以前の人々にとっては、あたり前のものであった機械、そして現代

では、ほとんど忘れ去られようとしている機械を丹念に掘り起し、文化というものを様々な面から考えさせてくれる。人間というものが、具体的な物と対応して生きている以上、このような日常ありふれた物にこそ、文化の本質が潜んでいると考えられる。

さらに、近代以前の機械は、近現代を考える上でも当然問題としなければならぬものである。ところが、これまで、近代以前の機械に関する研究はほとんどなく、著者は、資料集めに相当苦勞されたようである。この書は、具体的な物の発掘の書であるが、読みようによつては、現代の学的情況の欠陥を鋭くついているように思われる。

はじめにこの書が機械の紹介を主とする述べたが、最後の章「道具と技術」は、道具と機械に対する人間の意識の変遷のまとまった記述である。ただ、道具に比べて、機械についての記述は簡略にすぎると思われる。とくに、日本人の機械一般に対する意識に変化があったのかどうか気になったところである。

(江村治樹)

多田道太郎『遊びと日本人』

(A5判、二三七頁、筑摩書房)

思わず胸をつかれた、「ほっちっち、かもてなや」についての指摘(一六七ページ)など、感歎した箇所はいくつもあるが、わたしがいちばん感じたのは、これは、結論のない文章のじつにみごとに展開である、ということだった。結論があるべきだ、とする文章観にとらわれてきた(そして、脱出をねがっている)わたしなどにとって、新鮮な読むたのしさがあつた。いつだったか、くるまのなかで、ある雑誌にのせた拙文について、著者が感想をのべたことがあつたが、それは内容にたいする賛否ではなく、わたしがそれを書いたとき(書くという作業のとき)の心理と文章のたたみぐあいについての指摘で、それは、なかなか当たっていたのである。著者から——というよりも、多田さんからといったほうがこのばあい適切に思われるが——この本を頂戴して、わたしは、そのときのことを想起し、なるほどなあ、と思つた。そして、このよ

うな文章のスタイルを維持していくうえで、平生心とでもいうようなことを考えたのである。ともすれば、瑣末、末梢として視野から蹴落とされるものを、わざわざ拾いあげるのでなしに、普通の関心の対象とする、気持ちのもちかた、である。

小南一郎『楚辞』

(B6判、二八八頁、筑摩書房)

は、今もかわりがない。

しかし、今はためらうことをゆるされていいない。ゆるされていない以上、思い切つて、私のうけた感銘のみなもとを言い切らねばならない。私は自分の意識のなかをさぐり、そして、この本が「あいだ」に狙いを定めている、そのところに感銘をうけたのだと自分に言いかけせる。

「あいだ」とは時代と時代とのあいだで

この書物は昭和四十八年七月に発行されている。その書評が昭和五十年夏になつた二年間、私は重い気持ちでいたことになる。面白くない本だから重い気持ちだったのではない。まったく逆である。正直なところ、ここ数年間、この本ほど知的刺激をうけた本はなかった。この仕事のもつ、いわば重量感に圧倒されて、私には千字の「書評」をかくことができなかった。その重い気持ち

ある。また中原と南方といった地域のあいだでもある。前者には変動転移の苦悩があるうし、後者には交流接触の豊饒があるう。「あいだ」はふつう、軽々ととびこえられるが、著者はあえて、「あいだ」の淵に息をこらして身を沈めているようである。この本の独創と重厚とは、著者のこういう姿勢と無縁ではない。

変動としての「あいだ」と、接触としての「あいだ」とは、同じことばで表現されても機能はおなじではない。おなじではないと思うが、ではどうおなじではないのか。そのへんで私の考えはまた、闇のなかへまぎれこむ。私がこの書物で目をみはるのは、たとえば人称の問題に著者が目を向けている、そのことである。一人称の出現、三人称の確立、これらは文学史、思想史上の大事件であろうに、いまだに瞠目すべき説に出あったことはない。

著者は一人称の出現は巫覡の神おろしの場であったという。「神が降った巫覡は、みづから神になり代って一人称で神の来歴や神の気持を語った」。この一人称は「集団的なわれ」であると著者はいう。神がかりと「集団的なわれ」と、これはひとしい

ものか、それとも時代の推移があるのか。さらに、一人称から三人称への転化、逆に三人称から一人称への転化——こういうことにも『古事記』を例に著者は触れている。人称のとうした転移、あるいは意味の変化、あるいは担い手の集団の危機——こうした「あいだ」の淵から、著者は本文の読みに立ちむかう。

飯沼二郎『日本農業の再発見』

(B6版、二四八頁、日本放送出版協会)

この本の冒頭で、一農民の最近における自殺事件が報告される。ついでこの農民を死に追いやったものはだれかが問われる。

そしてその答えは日本の農政である。より具体的にいえば、独占資本とそれに加担した日本のインテリ、つまり農学者と役人だというのである。そして本書ではそうした彼らがくり返し糾弾される。ところでそうした元凶の日本農政とはなにか。それは大型機械化と単作経営化という二大方針である。したがってそうしたものを打ち倒し、それに代る裏返しの大平方針つまり小型機

楚辞注解の歴史について無知の私は、しかしそれでも、この姿勢は、きわめて新しいものであると、ひとりで合点して、大へんな仕事があらわれたものだと思嘆に終始している。この本のこしている闘争のものに心ひかれていのだ。

(多田道太郎)

械化と複合経営化を打ち出さなければならぬ。

以上が本書の骨子である。印象的にいって、本書は単なる学問的 polemic にとどまるものではなく、いささか politicalで religious でやえある思考スタイルをとっている。なげかわしい現状の背後に、「ニタリと笑う」ある種の Devil をみつければ、もちろんその Devil は倒さねばならぬ。そしてその Devil と正反対のことをなす者がつまり救済者だというわけである。ところで評者の関心はなんといっても、

救済策つまり「明日あるいは今日の日本農業をどうしたらいいか」の問題にあった。というのも、著者は冒頭で、「日本農業がアメリカ農業にたちうちでできるだけの国際競争力をもちうる方法を具体的に説明するためにこの本を書く」と述べられているからである。しかしその具体的な説明の部分はわずかに二ページであり、全体の一割にも充たなかった。ところでその妙案なるものは先にも挙げた小型機械化と複合経営化である。前者については評者も異論の余地がない。じっさい、大干拓地や、大規模

な耕地整理地区でないかぎり、大型機械など使えないのは自明だからである。ところで後者の方であるが、今後の日本の複合経営なるものの正確な輪郭が評者にははっきりつかめなかった。評者はイギリス農業革命をおこなったノーフォーク農法のサルマネでない日本版を予期し渴望したのであるが、著者はむしろ日本の伝統的な複合経営の再発見を強調される。しかしそうした日本の伝統的複合経営なるものはいっこうに革命的魅力を感じさせなかった。

本書は「農業の研究をはじめて三〇年ち

かくなろうとする」飯沼さんの多方面にわたる研究の総結集であり、評者のような農学の素人には飯沼農学なるものの全貌を楽々と知りうる点でこのうえないものといえる。いまはその農政上の概世的御意見と御提案に対し若干の感想を述べたにとどまったが、実は評者にはその資格がない。ほんとの農民である身近の友人たちに、なまの感想を聞き出したいものと思っている。

(山下正男)

おくりもの

桑原名誉教授、朝日文化賞受賞

一九五一年から七〇年までに七つ、平均すれば三年足らずに一つ、あれだけの質の共同研究の成果を次つぎと世におくった。受賞はむしろ遅きに失したとも言えよう。

いま喜びを共にしている延べ百十人余の研究者の協力を得るのに、五〇年代、六〇年代というあの一時期がはずか

って力があつた、という幸運は否むべくもなからうが、ひつきよう、決め手は班長であつた。

組織者としての桑原先生を、よき協力者のひとり鶴見俊輔さんは次のように分析している(『桑原武夫全集』4、解説)。この知己の言を紹介して祝辞にかえたい。

「負けいくさをたたかう人ではない。そうかと言って、自明の勝ちいくさをえらんでたかつて安全な勝利をたのしむ人でもない。きわめてみじかい時間に、実現可能性の幅を見きわめて、一見困難な状況の中で、自分が加担することによって辛うじて勝ちを制するようなゲームをえらぶ人である。」

仏教史家と私

——中国仏教史学史の研究——

ここに志磐という男がいる。彼は南宋時代を生きた人。仏教通史ともいうべき龐大な『仏祖統紀』五十四巻を著わしたことで、今日に名を伝える。その序文に、「紀伝・世家は太史公にのっとり、通鑑志は司馬公にのっとり」と、みずから述べるなかに、彼の自負と気概を読みとることができよう。共同研究班では、ここ数年来「法運通鑑志」を読みすすめてきたのだが、わたしが仏教者ならざるゆえか、司馬光にみずから擬えたほどの彼の仏教史にも、さほどの共感もわかない。たとえば、道教との対決、儒者・政治家の仏教弾圧への非難を述べるくだりで、彼の筆は最も鋭く、彼自身の姿を如実に顯わすのだが、いかに彼の筆が怒りに満ちようと、さしたる真実味をもってわたしに迫ってこないのである。むしろ、わたしがこの研究班に参加するようになったのは、司馬光の『資治通鑑』が隋唐以降歴史研究の基本史料たりう

るように、『仏祖統紀』もすくなくとも宋代以降の民衆の

有様、宗教運動を伝える根本史料たりうるからである。そしてなかでも、志磐が「愚夫愚婦を誑誘し」、どうにも救いようのない地獄墮ちだとして、懸命に排撃するところの「邪教」に興味があるからにはほかならない。こうした民衆のなかに浸透してゆく「邪教」の存在を無視しえなくなり、仏教通史のなかに書きこまねばならなかったこと自体、仏教史学としての一つの時代性を示すであらう。『仏祖統紀』を著わして正統の継承を記し、さぞかしこの功德によって今頃極楽浄土に往生しているであろう志磐の目には、我執の最たるこうした異端結社にしか興味を示さぬわたしなど、「邪の邪」としてしか映らないであらうと、苦笑を禁じえないのである。

研究班ではいま、研究報告とすべく、同じく宋の贊寧『僧史略』の現代語訳化にとりくんでいる。これまで中国仏教史学は、仏教者以外の初学者や、一般知識人には、きわめて馴染みにくい、事々しいことが多かったようである。並み居る仏教史学者のなかに立ち交り、あい変らず門外漢でしかないわたしなどにも、この現代語訳が完成すれば、かなり馴染みやよくなるのではないかと、期待している。また同じ班員の手により、中国高僧伝索引作りが進められているが、これもまた仏教史の専門家以外の研究者にも、多大な裨益をもたらすこと疑いなく、早速の出版が待たれる。

(夫馬 進)

詩学事始

——ボードレール研究——

E・パンヴニストはイオニア学派や原子論者デモクリトスにおいて、リズムの原語 *rhythmos* が「動くものが瞬間においてとる形態」の意味で一貫して使用され、固定的な事物の形態を示す *skhema* と区別されていたことを指適し、動詞 *rhein* (流れる) の派生語としての *rhythmos* を説明してきた従来の語源説を、近代のメタファーとしてしりぞけている。プラトンは「運動の中の秩序」の意味で *rhythmos* を使い、近代的な意味への移行をすでに見せており、アリストテレスは「あらゆる *rhythmos* は一定の運動によって測られる」といっており、完全に近代的意味でリズムをとらえているという。プラトン、アリストテレス流のリズムは運動のスケーマを意味していると言える。「ある要素の一定の間隔をおいた規則的な回帰」というリズムの近代的定義もスケーマのことを言っていることになる。我々は詩のリズム分析をリズムの原義に遡って、詩の形態分析に拡大しよう。

う。問題は詩の形態をリュトモス、スケーマのいずれとしてとらえ、分析するかである。さて詩は我々に声あるいは文字としてあらわれる。音声中心主義の伝統においては、文字は声のリュトモスはもちろん、スケーマさえも十分に再現し得ないものと見られ、声のスケーマをとらえるための二次言語が必要となり、韻律学(プロソディヤやメトリックス)、音韻論(フォノロジー)が発達している。また声のリュトモスを把握しようとする音声学が生まれる。音声中心主義に対抗して、文字の復権を主張する文字学(グラマトロジー)が実証科学として成立するためには、文字のリュトモスとスケーマをとらえる二次言語の獲得が必要となる。そして、伝統的な「声としての詩」に対して、「文字としての詩」が発見されなければならない。

声にせよ文字にせよ、シニフィアンの形態は、運動としての意味作用によって創り出されるものである。内容と形式をめぐる詩の本質論はシニフィアンのスケーマのみを形式としてとり出し、意味作用を運動としてとらえず、内容すなわちシニフィエと形式すなわちスケーマを静的な対応関係にとらえて、いずれが決定的かを議論していたにすぎない。

リュトモスとスケーマのいずれをとるかはもはや問題ではなく、両者を生み出す、運動としての意味作用を記

述する二次言語が追求されねばならない。目標はさておき詩学事始としてはまず詩の形態分析にとりくまなければならない。

(松田 清)

歩 み

— 家族問題の研究 —

この研究会は、夫婦・親子・相続をめぐる諸問題に関する理論的・実証的研究を、その主たる目的ないし内容として、昭和四十一年四月発足し、第一期は、夫婦問題なかでも離婚問題を中心に、第二期は、親子問題なかでも親子関係論や老親扶養の問題を中心に研究をすすめてきた。昭和四十五年刊行の拙編『現代の離婚問題』、本年九月刊行予定の拙編『現代の親子問題』（いずれも有斐閣より出版）は、その研究報告である。そして、昭和五〇年四月より第三期に入り、相続問題を中心に研究をすすめているが、最初の一年間は、とりあえず遺言制度ないし遺言をめぐる諸問題を中心に研究を行なう予定である。遺言法の分野は、法律学の分野においても未開拓な分野であり、ましてや法律学者のみならず、歴史学者、社会学者、医学者などをまじえた学際的な総合研究は

皆無の状態である上に、昨今では遺言制度に対する国民的関心も高まっており、また、立法論的な審議も云為されかけんとしている折柄、時宜に適したものであると考えたからである。

また、われわれは、一方では「産業構造の変革にとともなう家族関係の変遷」をテーマに、京都府下の山村（美山町）と大阪府下の都市（堺市）において、家族の生活ならびに生活意識、家族のコミュニケーション生活、主婦と老人の生活、家族内の人間関係などにつき実態調査を試みてきた。相前後して刊行した太田・井上編『山林における家族の生活』、太田・藤岡・野川・井上編『都市における家族の生活』（いずれも人文研より刊行）は、その調査報告である。

さらにまた、われわれは、第一期・第二期を通じて、右の如き理論的・実証的研究をすすめるかたわら、家族法ないし家族問題一般に関する判例・文献の蒐集・整理をも試みてきた。太田・加藤・井上編『家族問題文献集成』（昭和四五年人文研刊）、太田・米山・松尾・井上編『家族問題文献集成（欧文編）』（昭和四十七年人文研刊）、太田編『家族法判例・文献集成（戦後家族法学の歩み）』（昭和五〇年有斐閣刊）は、その成果である。家族問題ないし家族法の研究に興味をもたれる方々のお役に立てば幸いである。

(太田武男)

研究ノート



研究・業績・研究業績

尾崎雄二郎

鵜外『妄想』の主人公は、Forschung という意味の簡短で明確な日本語は無いという。

研究なんといふばんやりした語（ことは）は、實際役に立たない。載籍調べも研究ではないか。

六十年を越えて、今も事情は変らない、と見える。版本の鑑定も、だから研究と呼ばれていいだろう。

ただ研究の結果は実地の指針であって、しばしば極めて短かい表現に練り上げられていなければならぬから、それが「業績」の名で呼ばれることは、従ってまれである。以下に述べる「活字と見たらへり」というのも、そういう業績の一つなのだ

が。

ついでにいえば『妄想』には、あの主人公が「業績」の語を造って、日本自然科学界への置土産にしたのだ、としてある。

倉田淳之助先生の主宰される、当時のいわゆる文獻班の会説の席に、研究所所蔵の、著名な西夏文華嚴經が持ち込まれた。なぜだったかは、おぼえていない。

小川環樹先生、たちまちその活字印刷に非ざるやを疑われ、こんなとき、なんと表現すべきものなのか私は知らないが、日本語でいえば、要するにみんなぎょつとした。と、少なくとも私は思った。ぎょつとばかりもしていられないので、ともかく経文を上下から挿むへりが数箇所ですべて同一のものであることつまり本文とへり、とで印刷の時間が同じでないことを、本文が活字印刷であることの、いわば心証とした私である。そのころ考えていたことの、実地への適用であった。

正式のレポートとして藤枝晃先生の論文でその時のことに触れられたものがあるが、そこに私の名は出て来ない。先生、後に曰く、「君の名前が思い出せなかったものだから」。

さらに後、この西夏經の片割れは中国にあり、そしてそれは活字印刷に属するものであることが早くすでに中国の研究者によって指摘されている、ということも知った。

何度鑑定しなおしても、しかし、いいではないですか。そのときどきに、それはやはり心をゆすぶる「発見」ではあるのだから。今年、西田龍雄さんの訳注景印第一冊が刊行されたその原本についての話である。（七・六）

思想比較の一視点

——社会意識論への導入口——

園田 英弘

これは皮算用の話である。私は幕末—明治期以降の日本人の社会意識研究を主要なテーマとしている。社会意識とは（あまり市民権をもたない概念だが）官製の天皇制イデオロギーなどと異なり、また民衆の慣行レベルの意識とも異なり、荒っぽく言えば両者の中間にある。政治思想ほどには歴史状況によって規定されず、生活に密着した意識よりは変容しやすい、いわばコモリみたいな存在である。それだけに、とらえどころがなく、アプローチが数限りなくあるように思われる。民俗学のデータ、これは不可欠。思想の分析、これは不可欠。西洋文化の影響、これも不可欠。生活史のデータの発掘と分析、これまた不可欠。

しかし、よく考えてみると社会意識が時代性を帯びた認知と欲望のシステムであるかぎり、これらのものは社会意識の体系性を分析するためには弱い。特に社会に対する認知の構造を知るためには一種の工夫を必要とする。第一に西洋的概念を受け入れる以前の政治思想などを社会思想として読みかえる作業。従来、日本には社会はなかったとか、競争はなかったとかいう議論があるが、それは西洋的意味での社会や競争がなかったと

いうだけである。日本的に表現されている社会認識の中に、西洋の社会思想と比較可能なキー・コンセプトを見出し、社会思想として思想を整理しなおしてみる。「制度」という概念を中心として森有礼の思想の整理と分析を行なったので、今は「競争」という概念で「有名」「有用」「立志」「立身」「出世」などの概念を整理している。第二に、幕末期に日本へ来航し日本研究書を發表した者たちの認識構造を同様な手法で整理・分析し、中心的概念の文化差を発見する。例えば、オールコックの使用している「制度」という概念は、同時代の日本人の用例よりも「外在性」が低い。

このような手続をふめば、文化比較を前提にした日本人固有の社会認識の構造が明らかになり、社会意識といううつろいやすいものの中で、比較的变化しにくい社会意識の核心を見出すことができるのではなからうか。

偶像破壊と個別研究

見市 雅俊

イギリスの伝統的な労働史観であるフェビアン史観は、少々図式化していえば、所謂ウィッグ史観と表裏一体をなし、後者を労働史の領域に移しかえた、ないしは、それに対応する歴史観であった。

ウィッグ史観は、やがてネイミア学派からの挑戦をうけるが、フェビアン史観もまた、マルクス主義を別とすれば、少くとも二つの方向からの挑戦をうけることになる。そのひとつは、E・P・トムソンに代表されるニュー・レフトからの挑戦であった。トムソンは、例えば、フェビアン史家のハモンド夫妻が政府の手先による挑発あるいは捏造だとして切り捨てた「史料」を逆に民衆の「革命的な」動きの証拠としてとらえなおすことによって、一八世紀末から一八三〇年代初めまでの諸々の民衆運動に「革命的な運動」が存在したことを立証しようとした。

もうひとつは、広義の実証主義である。ここでの特徴は、ともすれば一般的に、ないし公式主義的に語られる「階級意識」の覚醒とか、運動の生成および支持基盤などを、限定された対象にたいする詳細な研究をふまえたうえで、とらえなおそうとすることである。当然、予想されることであるが、このような研究から出てくる成果は、多くの場合、専ら偶像破壊的なものとなり、個別研究は精緻になるが、全体的な視野は失われる傾向にある。

おくりもの

人文科学協会助成金 ②

岡 本 務 氏

岡本務氏は昭和二十九年京都大学文学部哲学科を卒業、一時、人文科学研究所東支部で非常勤として務めたことがあったが、その後天理高等学校第二部教諭となった。氏の研究は哲学出身

向にある。

偶像破壊的な事例を二つだけ紹介しておきたい。一八三二年五月七日、バーミンガムのニュー・ホール・ヒルでの議会改革派の野外集会の参加者は一〇万人とも二〇万人ともいわれるが、バーミンガム地方の人口や会場の立地条件からみて、それは全くの誇張である。そして、一八三一年から三二年にかけての議会改革運動全体についても、この種の誇張があったのではないか。

最初の総同盟組織として知られる一八三四年の「全国労働組合大連合」は五〇万人の加盟組合員を擁したとされるが、少くとも正式な加盟員は一万六千人であった。

社会運動史（フェビアン的な労働史でなく）の領域が、あるイデオロギーの公式主義的な歴史観の独壇場の状態から解放され、ごく普通の研究領域となるためには、このように非常に個別的で偶像破壊的な研究状況も、ある時期には必要ではなからうか。

者にふさわしく、多方面かつ雄大であるが、とくに勤務校との関係上、天理教に対してもきわめて興味ある研究を積み重ねてきた。氏の天理教分析は、いわゆる局外者の超越的批判といったものではなく、個々の天理教徒の心の深層にまで透徹したものであるといえる。その上、教会組織とか、天理教思想の日本精神史における位置づけといった側面からもアプローチがなされている。氏は既に天理教に関し、二、三の文を発表しているが、現在「天理教徒の精神世界と教会活動」というテーマで本格的な仕上げに没頭中である。

旅

ボストンの買物

熊倉 功夫

私は買物が大好きだ。お金がなくなるとも、ウインドウショッピングだけで十分楽しい。一年間滞在したアメリカ東部のボストンの買物を報告しよう。アメリカといえばスーパーマーケット。おもしろ味乾燥な印象だが、しかしこんな便利なものとは思わなかった。概して西海岸の方が大きなスーパーがあるように思えるが、ボストンのものも結構大きい。しかもそれが二つ、三つと寄りあつてショッピングセンターをなしている場合には端から端まで二キロメートルぐらいある。とても車なしでは住めないわけだ。朝八時から夜の十二時まで開いているのがありがたい。デパートは有名なシアーズの他に大きなのは二つある。特にファイリンというデパートは特売で有名だ。地下二階が特売場。いついっても満員で、新しい品が沢山でる月曜日の朝は行列ができるというが私は実見しなかった。クリスマス前に行った時など、パーティー用のドレスを物色する女性で押合いへしあい。着替室がいっぱいだから売場の真中で下着一枚になつてあれこれ試しているおば様族には驚いた。

さて日常の買物に移る。朝の食事は果物にトースト。パンはそのへんで買ったのはとてもまずい。どうしてアメリカ人はフニャ

フニャのパンを食べるのか。我々に合うパンはイタリア人街のパンが良い。おいしいパンを食べようと思つたら二〇分ぐらい車を走らせてケネディの生家の近くのユダヤ人のパン屋か、イタリア人のヘイ・マーケットまでゆく。このヘイ・マーケットはボストンで一番面白い青空市で何でもすこぶる安い。が一寸油断すると半分くさったレタスとか、いつまで煮てもやわらかくならないアーチチョークをつかませられる。私が足しげく通つた魚屋もこのマーケットのイタリア人の店だ。ここには他に絶対ないタコとイカ（紋印イカもある）がいつもあるし、うまくいけばおそろしく新鮮な鰯や鯛がある。この鰯を使つてよくパーティーに焙烙焼をしたものだ（その時は夜陰に乗じて前の家の松を一枝折つて鯛の上に散らすことにしていた）。刺身を食べる時は日本人御愛用のリーガル・シーフードへ行く。平目・鱈・貝柱、秋には鰯のすてきな刺身が日本よりはるかに安い。特においしい果物を食べようとする二〇キロ程はなれた隣町の農場へゆかねばならぬ。ウィルソン・ファームという農場はことに最近人気の的で、週末などは駐車場がいっぱいになる。このアップルサイダーは天下第一品。四、五日置くと醗酵して本当にサイダーになる。

ゆつくり朝食をすませると大学へ。そしてしばらく仕事をする。と大学町の中心のスクエアーに出かける。ここにある新聞売場はハーバードの名所だが最近外観を新しくしてしまった。ここで新聞を買う。月曜日ならニューヨークタイムズ。そして少しインテリ臭い顔をする。木曜日ならボストングローブ。これにはその週の特売特集が載る。週末なら学生向きの週間紙。この三行記事は二時間は絶対楽しめるような個人広告でいっぱいだ。新聞をかか

えて昼めしをすませたら、近くの毛皮屋でも覗こうか、あるいはシェイカーの家具屋を見てから本屋で図録でも眺めようか、はたまた地下鉄に乗ってビーコンヒルの骨董屋へ土産物でも探しに行こうか、というところだが既に紙数もつきた。

国際会議はハラがへる

横山俊夫

三月一四日深夜、大阪発ボンベイ行直行便でデリー空港についた私は、はなはだ当惑した。「ステト・ゲストノ」「コクレン、ユネスコデスヨ」と、教育省のお役人二人の先導で、いつもはさんざんいやがらせをされる税関を、あつというまに通りすぎ、いっとき談判しなくてはならないタクシー屋の垣根をかきわけ、息つく間もなく車で宿舍へ直送、気がつくとも齒ブラシ口に、シャワートを浴びていた。

二月末にパリから招待をうけてから、「ネイション・ビルディング・イン・エシア」なるテーマにあうような論文を、年度末の多忙のあいまに作ってみたが、ようやく最終的なブラシアップを終えたのは、バンコク離陸後の機内であった。

翌朝、大学構内の会場を訪れると、私が一番のり、論文提出も一人と聞かされて、ようやくインド式プランニングの模式に思い至った。それではと、ロディ地区の友人を突然の訪問でおどろかせ、二人で大好きなインド映画を楽しむことにした。今年の人気女優

は一六歳のパンジャブの少女、ニートウ・シン嬢であった。

さて、いよいよ会議初日。「昨夜、オーストラリアカラツイタバカリデス」「私ナド今朝デスヨ。今日ノ会議ハナムルタメニ出ルノデス」「論文出来テマスカ?」「ブウブウ」。それでも、ついに初日にまに会わなかったカンボジア・モンゴル・ビルマの連中をのぞく十数人が宿舍の前庭で待っていると、屋根からタイヤまで赤と黄のペンキでぬりたてた、気の狂いそうなバスがやって来て会場へ。教育省の代表から、アジアは独立したが社会科学はコロナイズされたままだと、機関銃の如きインド英語を浴びせられるや、やや熱狂的にオープンと相なった。

まず、客員講師陣の講演。シンガポール大学のアラタス先生。「知識人とネイション・ビルディング」。独立後のアジア諸国の指導層を大胆にこきおろしたのだから、早々と大騒ぎ。ついで、インド発展社会研究所のコタリ先生。「フレイム・ワークについて」「第三世界論」。パリからツイオルコフスキ先生。「現代ヨーロッパの少数民族問題」。その他数名のインド・インドネシアの社会科学者、とつづく。

連日、九時からはじめ、一―時に三〇分のコーヒープレーク、二時に四五分のランチタイム、それ以外は休みなく、夕刻五時、六時までつづく。三月のデリーはそうとうに暑い。まず、昼寝を習慣とする国から来た人々が悲鳴をあげた。それに、討論の時間も短い。何といっても、各国からの専門家を、若いというだけで、家長主義的に扱うのが氣にくわれない。三日後、早速「レポルト」。我々の発表時間を大幅に設け、議長は参加者全員のローテーションとする。ついでに私のデザインで、机を小じんまりした円テー

ブルに。また講義用の立机はのぞかれた。格式はった大声の討論はようやく終った。

口を開くと、「マルクス・レーニン主義」のABCを聞かせたソ連科学アカデミーの代表も、中央アジアでのフィールド・ワークの個人的な体験を語った。人口問題も、インドネシアのラッタロ先生が子供八人と聞いては、彼の哲学をまず拝聴せざるを得ない。しだいに興味深い集りとなった。

それでも、インドの大学は周囲の環境とは別の天地だ。くだんのバスで送迎される道々の光景はどうだ。五、六日すぎると、どうもいけない。我々が会議で問題を扱うセンスは少し高路にすぎないか。そこで、私は新しい友人をさそって、毎夕バスを途中下車することにした。ジャマ・マスジドからトルクマン・ゲートまでの回教徒居住区の迷路は、いつも人々の体臭と叫び声とはこりで充滿している。毎年、ムガル帝国の料理をごちそうしてくれる印刷屋のアブドル・カデルさんに出くわした。「ネイション・ビルディング?なにごとともアッラーのおぼしめしさ」。今年は、大事そうに錠をおろした抽出しの中から、ハブシ・ハルワという古き良き時代のお菓子をおふるまってくれた。「女房、子供にや食わせんよ」「ギーとミルクと砂糖に麦芽をまぜてな、ローストする。こがし具合がトップ・シークレットさ」。この、キャラメルに似た、しかし格段に香り高い団子を作るのは、今オールドデリーに住む老職人一人だという。私がうなづくと、「そうさ、ザ・ラスト・フエイディング・フレイバー・オブ・ムガル・エンパイア」と口中ハルワのカデル氏。

昼間の会議もさることながら、夜もまた多忙であった。満月に

近い一夜、ジンギスカンの時代を思わせる祭旗を林立させた、チベットの難民キャンプで味わったチャン。カシミリ・ゲートの近く、某レストランで「バラ」つまり大きい、と注文すると出てくる骨付きの牛肉／インドにもあるのだ。とにかく、国際会議とはハラのへるものであることを知った。

コミュニケーションで問題になるのは、各国方言の英語はともかく、沈黙が意味を伝える文化圏からの参加者と、そうでない人々との間である。私が議長のととき、意図的に発言の少ない人々に質問した。彼らの返答は手短かであるが充分説得的であった。「ナイス・チュアリング・ドクタ・トシオノ」「おお、さんきゅう」「ナニ?トシオハ一人デシャベンテオッタデハナイカ」。議長は終始静かに座っているだけと考える国よりも意外に多い。何度か、ちよつとした「人類学」をするチャンスがあった。

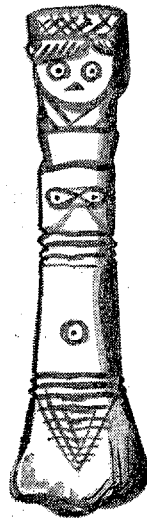
最終日の一般討論で、各国の資料や情報の交換について、いくつかの提案がなされ、また全員の賛成で、今回のメンバースhipを維持することになった。二年ほど後には、どこかで再会しようというわけである。

インドで開かれた関係で、中国・パキスタンなどからの代表がこなかったのは残念だった。お別れのパーティは、ハイデラバドのマハラジャ、ニザームの旧別邸であった。その後、大急ぎで荷物をまとめ、夜汽車でパンジャブの村へ休養に出かけた。二年ぶりに村人と再会して、共々大喜びであった。連日、脂っこいパンジャブのポテト料理と「金鷹印」ビールにせめてたてられた。

帰国後、北白川で藤枝晃先生につかまって一喝くらった。「なんやきみは、飢饉の国に行つとて、ふとって帰つとるやないか」。

書いたもの一覽

一九七四年九月—一九七五年四月
(五十首順、●印は単行本)



・会 田 雄 次

正論

サンケイ新聞、毎月一回 九月—四月

・飛 鳥 井 雅 道

近代作家と散文精神(『現代文学講座』第三卷)

至文堂 一二月

自由な魂のバネ(『大杉栄書簡集』解説)

海燕書房 一月

大正デモクラシーとわれわれ

朝日新聞 二月—七月

・飯 沼 二 郎

大塚久雄とその時代

思想の科学 九月臨時増刊号

沖縄の産業と風土(座談会、福仲憲、関広延)

上下

青い海 三六、三七号 九月、十一月

農業全書

技術と普及 九月号

イエスのことば

熊本日日新聞 毎週木曜 九月—十二月

●石高制の研究——日本型絶対主義の基礎構造——

ミネルヴァ書房 一〇月

The Curious Crisis in Japanese Agriculture

Japan Quarterly Vol. XXI, No. 4 朝日新聞社 一〇月

沖縄農業論(一一四)

琉球新報 一〇月一日—十四日

視点 毎日新聞 毎週金曜 一〇月—十二月

書評・笠原芳光、森岡敏『キリスト教の戦争責任』興文 十一月

日本農業に明日はあるか(上中下)酪農事情 十一月号—一月号

朝鮮問題の原点 アジア時報 毎日新聞社 一月号

書評・T・K生『韓国からの通信』統一評論 一月号

国際分業論と日本農業の運命 月刊食糧 一月号

日韓関係のひずみ 時事教養 四八五号 二月

●イエスの言葉による行動のための手引き 日本基督教団出版局 二月

●日本農業の再発見 日本放送出版協会 三月

結構づくめの農業政策 用水と営農 四月号

・井 上 清

天皇の戦争責任(一一四) 現代の眼 一月号—四月号

・上山 春 平

空海(『日本仏教——この人と思想』) 朝日新聞社 十二月

藤原不比等(『歴史の視点』上巻) 日本放送出版協会 一月

今西錦司全集・第五卷・解題

講談社 一月

・内井 惣七

"Ought" and Conditionals.

Logique et Analyse, Vol. 17, Nos. 65—66. 一〇月

倫理判断の普遍化可能性について

関西哲学会紀要 第二二冊 十一月

・江村 治樹

漢代官僚論の研究史的考察——とくに『主・客』論

争によせて——

名古屋大学東洋史研究報告 三号 四月

・太田 武男

◎家族法判例・文献集成——戦後家族法学の歩み——

有斐閣 三月

・尾崎 雄二郎

和語と漢語のあいだ——「宗祇曼字百韻」輪読——

(三一五) (佐竹昭広、島津忠夫両氏と)

文芸展望 秋、冬、春号

馬王堆の老子

書評・樋口隆康『古代中国を発掘する』

サンケイ新聞 三月五日

・小野 和子

顧炎武の時代(『中国文明選』七卷『顧炎武集』月報)

朝日新聞社 一一月

・樺山 紘一

飢饉のうちの日本文化

法と政治の社会理論(河野健二編『ブルードン研究』)

歴史と文学 九号 九月

三人のマルクス

ゴシック世界の思想像

天邪鬼の戦後——花田清輝論

書評・今野国雄『西欧中世の社会と教会』 中央公論 一二月月号

都市はメディアである

ルネサンス像転身

「金印勅書」ほか、(『世界史史料集』) 知の考古学 創刊号 三月

ルネサンス概念の再検討 山川出版社 三月

・川 勝 義雄

漢書律曆志(共訳『世界の名著』続1『中国の科学』)

読売新聞 四月一四日

Sie Ling-yun et le Che chouo sin yu.

Mélanges de sinologie

offerts à Monsieur Paul Demiéville, Vol. II, 1975.

・河 野 健二

所有・経営・労働について

中央公論経営問題 冬季特別号 一一月

現代資本主義の危機とコンドラチエフ

エコノミスト 臨時増刊 二月

◎啓蒙思想家としての福沢諭吉

福沢記念選書 三月

不便のよさ

PHP 三月

自然環境と社会環境

環境文化 四月

熊倉 功夫

知識人の教養（『日本生活文化史』第六卷）

九月

わびとすき、寛永文化（『歴史の視点』中巻）

三月

柳宮御道具帳

茶湯・研究と資料 九号

三月

伝説芸能研究の方法（『日本文化史学への提言』）

四月

小南 一郎

「神仙伝」の復元（入矢教授小川教授退休記念中国文学語学論集）

一〇月

副島 圓照

日本ブルジョワジーの中国政策

一〇月

園田 英弘

日本史研究 一五〇・一五一合併号 三月

リバーシティの青年（訳）

現代のエスプリ 八六号 九月

教育勅語考

朝日新聞 十一月二八日

森有礼の思想体系における国家主義教育の成立過程

人文学報 三九号 三月

忠誠心の射程――

現代の眼 九月号

竹 内 実

「毛沢東思想万歳」讃

九月号

遙かなる歴史のなかで（対談）

国語通信 一〇月号

漱石の詩

文学 一一月号

北京大学社会科学代表団を迎えて 朝日新聞 十一月二七日

「批林批孔」と「伝統」 春秋 一二月号

現代の文章と古典（『中国古典文学大系』月報） 二月

孔子批判①――その淵源 国語展望 一一月号

孔子批判②――その論理 国語展望 三月号

視点 毎日新聞 毎火曜 一月八日―三月二六日

皇帝型権力と宰相型権力 中央公論 三月号

「批林批孔」運動と『老子』

アジア・クォーターリー 七卷二号 四月

「覇権」の意味するもの 朝日新聞（東京版） 四月三〇日

◎毛沢東 文化大革命を語る（編訳） 現代評論社 二月

◎毛沢東 哲学問題を語る（編訳） 現代評論社 四月

・多田 道太郎

住宅の美意識（『近畿園住民の「住みよさ」意識』）

六月

遊びと日本人

国民住宅建設協会 六月

入浴の比較文化論（『日本生活文化史』月報） 河出書房 七月

ブルードンの家庭論（河野健二編『ブルードン研究』） 岩波書店 九月

高度成長社会は何であつたか（対談） 展望 一〇月

◎日本人の生活空間（共著） 朝日新聞社 一〇月

血と闇と夢と 潮 一一月

南太平洋への隠遁――ゴーガン論 Energy 四〇号 二月

方丈の思考(対談)

集い

柳田国男と身辺の学

田中 淡

◎鹿島神宮仮殿修理工事報告書

中国建築の歴史(二一四)(共訳)

ボス地主の荘園——曲阜の「孔府」——(訳)

スタンダード仏和辞典増補改訂版(建築用語)

唐河メリヤス工場の漢代画像石墓(抄訳)

谷 泰

松井健「民族分類の構造」(コメント)

磯 波 護

唐代の県尉

中村 賢二郎

再洗礼派と終末観(会田・中村編『異端運動の研究』)

再洗礼派と社会(会田・中村編『異端運動の研究』)

国文学 二月

リクリエーション 一月

現代思想 四月

鹿島神宮社務所 一月

建築知識 一—四月

建築雑誌 二月

大修館書店 三月

建築雑誌 三月

季刊人類学 六卷一号 二月

史林 五七卷五号 九月

京大人文研 三月

京大人文研 三月

京大人文研 三月

京大人文研 三月

京大人文研 三月

京大人文研 三月

京大人文研 三月

京大人文研 三月

京大人文研 三月

京大人文研 三月

京大人文研 三月

京大人文研 三月

京大人文研 三月

・林 巳奈夫

漢代の古物使用(『中国の歴史』一〇卷、月報)

「縁」の話(『全訳漢文大系』一六卷、月報)

・林屋辰三郎

消息数寄・古田織部

北野大茶湯の時・所・人

二条城の歴史(図録『二条城』)

東山文化の祖・後小松天皇(『対談天皇日本史』)

歌舞伎の歴史と美(『美と歌舞伎』)

◎『京童から町衆へ』(共編『京都庶民生活史』一卷)

◎『町人から市民へ』(共編『京都庶民生活史』二卷)

歴史と芸能(『講座古代学』)

◎『歴史の視点』上巻(共編)

書評・『進慶の彫刻』

京都千年・花曼茶羅(いけばな展記録集)

『古都の近代百年』(共編『京都庶民生活史』三卷)

内乱のなかの人間関係(『図説日本の歴史』月報)

日本のなかの中部

毎日新聞 二月二五日

集英社 二月

講談社 二月

中央公論社 一月

日本放送出版協会 一月

朝日新聞 一月二七日

京都新聞社 二月

講談社 二月

集英社 二月

毎日新聞 二月二五日

京都人のくらしと文化風土（座談会） 朝日新聞 二月二七日

神と王の遍歴（古代史探訪1・2） 野性時代 二—三月

「古都の近代」序説（『京都の歴史』八巻） 京都市 三月

消息数寄・織田有楽 茶湯 三月

宗旦の手紙（座談会） 茶道雑誌 四月

語りの流れ（連載三—一〇） 子どもの館 九月—四月

樋口 謹 一 思想の科学 臨時増刊 九月

丸山真男とその時代 月刊エコノミスト 一二月

伝統的君主と「共和制的君主」 文春デラックス 一月

運動体としての赤穂浪士 書評・ベ平連編『資料・ベ平連』朝日ジャーナル 三月七日

解説・松本清張『球形の荒野』（文春文庫） 一月

書評・ベ平連編『資料・ベ平連』 朝日ジャーナル 三月七日

・日比野 丈夫 中国古典文学大系（二二巻） 平凡社 九月

◎水経注抄訳（『中国古典文学大系』二二巻） 平凡社 九月

北宋時代の東京路（青山博士古稀記念宋代史論叢） 省心書房 九月

国土開発と文化財（西山卯三等編『国土と人権』） 時事通信社 一〇月

東アジアの中の日本のおそび 文春デラックス 一巻八号 一二月

◎目で見える中国の歴史（『中国の歴史』一〇巻） 講談社 二月

華僑の家族生活 アジア文化 一一巻四号 三月

雲岡石窟続補——第一八洞実測図解説 京大人文研 三月

アジア学の系譜（対談） アジア 一〇巻四号 四月

中国史蹟探訪の思い出（『中国文化史蹟』第一回月報） 法蔵館 四月

・藤 枝 晃 三教義疏についての私見 読売新聞 一二月二八日

二つの学会（『今西錦司全集』七巻、月報） 講談社 三月

探検・学問・異端（対談、四手井綱英氏と） 朝日新聞（京都版） 三月二五日

◎『聖徳太子集』（共著、『日本思想大系』二巻） 岩波書店 四月

・古屋 哲夫 北一輝論（二、三） 人文学報 三八、三九号 一〇月、三月

牧田 諦 亮 弘明集研究巻下（訳注篇下） 人文科学研究所 三月

◎唐高僧伝索引（中、下）（共編） 平楽寺書店 三月

◎塚本善隆著作集第二巻（編集・解題） 大東出版社 一〇月

◎塚本善隆著作集第三巻（編集・解題） 大東出版社 三月

中国仏教史の流れ（三、四） アジア文化 一一巻三、四号 一月、三月

・松原 正 毅 カミ、つきもの、ヒト——島原半島の民間信仰をめぐ 季刊人類学 五巻四号 一二月

つて——（共同執筆）

季刊人類学 五巻四号 一二月

器の人類学

水と人間 二号 三月

トルコの村の家族と親族

人文学報 三九号 三月

味覚表現——食の文化誌、——

栄養と料理 四月号

・見市雅俊

J・E・スミスとイギリス労働運動——知られざるオーエン主義者もしくはサン・シモン主義者 人文学報 三九号 三月

・三浦国雄

伊川撃攘集の世界

東方学報 四七号 一月

・山下正男

ブルードンと「正義」(河野健二編『ブルードン研究』)

岩波書店 九月

中世における論理学と文法学 中世思想研究 一六号 一〇月

●訳、サモン『論理学』(改訂増補版)

哲学の絵解きについて

・山田慶児

●中国の科学(共訳『世界の名著』続二)

・吉川忠夫

●ニードム『中国の科学と文明』二卷 思想史、上(共訳)

・横山俊夫

The Movement of People and Cultural Integration

(Fourth Regional Training Seminar on the Sociology of Development, University of Delhi, UNESCO, March 1975)-mimeo-Delhi

三月

・吉田光邦

神の代理人としての科学

不安からの超越

江戸の舶来品

ベネチアンガラス

機械と象徴

伝統工芸

人物文様起原考

明清間西洋活字伝来考略

テクノロジーとイメージ

クルト・ネットーのスケッチ「明治の夜明け」

●機械

日本モノカルチニア論

書物のはじまり

伝統産業のこと

洋式製紙の導入

火と文化

はんこの重み

思索の旅

人とモノの間

大江山

町衆の息吹き

中国染織史の金襴・緞子

理想 九月

世界政経 九月

別冊太陽 九月

れ・じゅわいよ 一〇月

衣生活研究 一〇月

日本の旅路 九 一一月

日本の文様 一七 一一月

現代技術評論 一一月

テクノロジーと芸術 一一月

法政大学出版局 一二月

YTVリポート 一月

世界グラフィックデザイン 六月

美しい日本の旅 八月

播磨技術ニュース 一月

はなの 一月

家庭画報 一月

朝日ジャーナル 一月二九日

アドバタイジング 二月

サンケイ観世能 二月

京都 三月

華道雑誌 三月

飛鳥の石

メダルの歴史

書評・『歴史としての学問』

プリント産業の未来像

コピー文化の波動と起点

●時から時計へ

ひな人形の変遷

田能村竹田

●京鹿の子(編著)

工芸史隨筆

季刊現代彫刻 三月

季刊現代彫刻 三月

朝日ジャーナル 三月

カラーデザイン 三月

日本及日本人 四月

平凡社 四月

ポエカ 四月

人物日本の歴史 四月

京都紋工業組合 四月

日本美術工業 九一二月

ベルシア・カーペット小史

日本古典文学全集(月報)

平賀源内、遊び(座談会)

渡部 徹

●解放運動の理論と歴史

日本共産主義運動史の一断面(岸本英太郎先生選歴記念)

『労使関係の論理と展開』

水平社の創立前後(京都市職員部落問題研究会)

『京都市職員と部落問題』第四集)

部落解放運動史の研究と課題

染織と生活 九、一二、三月

小学館 九一四月

歴史の視点 三月

明治図書 一〇月

有斐閣 二月

部落解放 六七号 三月

人のうごき

一日付)

。竹内 実助教授(東方面)は、教授に昇任。

。尾崎雄二郎教授部教授を、当研究所(附属東洋学文獻センター)に配置換。

。江村治樹氏を助手(東方面)に採用。

。磯波 護氏(神戸大学助教授)を当研究所助教授(東方面)に配置換。

。松原正毅助手(西洋部)は講師に昇任。

。藤枝 晃教授(東方面)市原亨吉教授(附属東洋学文獻センター)田中重雄講師(東方面)は停年退官。

。永田英正助教授(附属東洋学文獻センター)は富山大学文理学部教授に配置換。

。岩井良吉事務長は医学部に、後任として笠原茂樹(大型計算センター)事務長が当研究所に配置換(以上、五〇年四月一日付)

。田中 淡助手は、四九年八月一九日、韓国で古建築の調査、同月三十一日帰国。

。桑山正進助手は、四九年九月五日、デリー・カプール等で考古学的調査、五〇年二月一二日帰国。

。河野健二教授は、四九年一〇月二六日、パリ大学で第二次世界大戦史国際委員会に出席、チュニス博物館等で第二次世界大戦に関する調査、同年一二月九日帰国。

。熊倉功夫助手は、四九年三月一八日より一ケ年間、米欧各地の日本研究について調査、五〇年四月一二日帰国。

。横山俊夫助手は、五〇年三月一四日、エンクレシア大学経済発展研究所(インド)で研修セミナーに出席、中文大学で研究資料蒐集、同年四月八日帰国。

。荒牧典俊助手(東方面)は教養部助教授に配置換(四九年七月一日付)

。愛宕 元助手(東方面)は教養部講師に配置換(四九年八月一日付)

。夫馬 進氏を助手(東方面)に採用(四九年九月一日付)

。大前 真氏を助手(日本部)に採用(四九年二月一日付)

。茂木信之氏を助手(東方面)に採用(五〇年三月一日付)

。桑山正進助手(東方面)は停任の上、京都市立芸術大学講師として転出(五〇年四月一日付)